

## 研究

## 初期マルクスにおける論理と歴史

——貨幣把握の特殊性とかかわって——

山田祥夫

## 〔1〕はじめに

本稿は、貨幣把握の特殊性への着目を通じて、初期マルクスにおける論理と歴史の交錯をまず示し、その上で、両者（論理と歴史）が初期マルクスの著作において不可分に結びついているという点を明らかにすることを課題とするものである。具体的には、『経済学・哲学草稿』<sup>2)</sup>「疎外された労働」断片における論理的方法、『ミル評註』<sup>4)</sup>における貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論）、両者の不可分な結びつき、という順序で考察をおこなっていく。

以下、本稿の背景となっているものについて簡単に説明するが、その前に、次のことをあらかじめ断っておきたい。それは、執筆順序の確定がわれわれの意図するところではないため、執筆順序問題についてはラービン説（「疎外された労働」断片→『リカードウ評註』→『ミル評註』という順序で執筆されたとする説）を前提した上で考察をおこなっていく<sup>5)</sup>ということである。

さて、話をもとに戻すが、われわれは、『経哲草稿』「疎外された労働」断片と『ミル評註』との関連を問題にするという点では、中川弘氏と同じ問題意識に基づいている。氏は次のように述べておられる。——「近代市民社会分析の基準（商品＝貨幣関係基準、資本関係基準）」は「有意味的関連をもつものであるにもかかわらず、それぞれ『ミル評註』と『経哲草稿』とに「さしあたり切り離されたまま継承されて」いった、と（『経済学・哲学草稿』と『ミル評註』『商学論集』、福島大学、第37巻第2号、1968年10月所収、16頁）<sup>6)</sup>。

つまり、中川氏の場合は、これら二つの著作の関連にふれてはいても深入りはされないわけであり、その点がわれわれの場合と異なっている。われわれが示したいのは、こ

れら二つの著作が不可分に結びついており、しかもそれだけではなく、論理的方法に基づいて書かれている「疎外された労働」断片は、貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論）が展開されている『ミル評註』に、マルクス自身の問題意識において直接連続している、ということである。従って、両者の不可分な結びつきを示す前に、それぞれの著作の論理展開の仕方とその内容をまず明らかにする必要がある。

さて、以上で課題設定を終え、本稿におけるこれからの考察の進め方について説明しておきたい。

まず、〔2〕では、労働、私的所有および貨幣の疎外論の把握について、〔3〕のために必要な限りで検討する。従って、〔2〕は〔3〕の予備作業という位置づけになる。

そして、〔3〕で本稿の課題を直接にとりあげることになるが、その課題を改めて述べるならば次のようになる。——まず、『経哲草稿』「疎外された労働」断片が論理的方法に基づいて書かれていることを明らかにし、次に、『ミル評註』において貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論）、すなわち、貨幣が資本制に固有なものとして生成してくるという論理が展開されていることを明らかにする。そして最後に、これら二つの著作が不可分に結びついていること、すなわち、「疎外された労働」断片が『ミル評註』に、マルクス自身の問題意識において連続しているということを明らかにする。

- 1) 論理と歴史の問題には、いくつかの要素が含まれるであろうが、本稿では方法論が直接に問題となっているわけではなく、次のような意味に限定してこの言葉を用いることにしたい。

論理的方法——特定の社会システムに分析対象を限定した上で論理を展開する方法。

歴史的方法——資本制社会以前の社会をも分析対象の一部とするような論理展開の方法。

（ここでの「特定の社会システム」は、のちにマルクスが用いた言葉で表現すれば、「資本制社会」となる。なお、「社会システム」概念については、有井行夫氏の次の著書を参照されたい。『マルクスの社会システム理論』有斐閣、1987年、とくに36～41頁）

歴史的発生論——資本制以前の状態から資本制的な状態への発生の論理。

- 2) 本稿で論理と歴史の「交錯」という場合、それらが混在していることを意味するにとどまっておらず、従って、その場合は、それらが「不可分に結びついている」ことを必要としない。
- 3) 以下、この『経済学・哲学草稿』を『経哲草稿』と省略する。『経哲草稿』から引用する際には次のものを用いる。—— Marx/Engels Gesamtausgabe (= MEGA<sup>②</sup>), Erste Abteilung, Band 2, Dietz Verlag, Berlin, 1982. 城塚登・田中吉六共訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫、1964年。
- 4) 『ミル評註』から引用する際には次のものを用いる。—— Marx/Engels Gesamtausgabe, Vierte Abteilung, Band 2, Dietz Verlag, Berlin, 1981. 杉原四郎・重田晃一共訳『経済学ノート』未来社、1970年。

『経哲草稿』、『ミル評註』のいずれから引用する場合も、訳者あるいは引用者による補足

は〔 〕内に入れ、段落の変わり目は／で示す。ただし訳文は一部変更している。

また、『経哲草稿』からの引用文に関しては、アドラツキー版で校訂の際に補った部分は〈 〉内に入れることにする。

- 5) ラービン説については次の論文を参照されたい。N. I. Lapin, *Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den „Ökonomisch-philosophischen Manuskripten“ von Marx*, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 1969, Heft 2. 細見英訳「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」『思想』岩波書店, 1971年3月号所収。

なお、執筆順序問題をめぐる論争については、次の論文を参照されたい。

岡崎栄松「いわゆるバリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について」『立命館経済学』第39巻第1号, 1990年4月所収。

岡崎栄松「いわゆるラービン論文とその公表直後の波紋」『立命館経済学』第39巻第6号, 1991年2月所収。

- 6) ここでの「継承」という表現からも察せられるように、中川氏は、これら二つの分析基準が、『経哲草稿』や『ミル評註』以前の『独仏年誌』の二論稿、すなわち「ユダヤ人問題によせて」（これが商品＝貨幣関係基準に対応する）と「ヘーゲル法哲学批判・序説」（これは資本関係基準に対応する）とにおいてひとまず定礎されると考えておられる。

## 〔2〕 労働、私的所有および貨幣の疎外論的把握

### (1) 『経哲草稿』「疎外された労働」断片

すでに述べたように、「疎外された労働」断片は、分析対象を特定の社会システムに限定した上で論理を展開したものだが、このことについての詳しい説明をわれわれはまだおこなってはいない。われわれは、次の〔3〕でこのことを正面から取りあげるので、説明の重複を避けるために、ここではその点についてはただ前提しておくにとどめる。

以下、〔3〕のために必要な限りで、「疎外された労働」断片の内容を見ていくことにする。

まず、「疎外された労働」の第一規定については、直接的な生活手段と生産手段とが明確に区別された上で、それら二重の側面での疎外が述べられていることに留意すべきである。

一例を挙げると、直接的な生活手段は、「狭い意味での生活手段」という言葉で、生産手段は、「労働の生活手段」という言葉で表現されている（MEGA<sup>②</sup>, I/2, S. 237. 前掲訳書89頁）。

とりわけ、後者の疎外が述べられていることから、マルクスが資本制的な特殊歴史性をそれなりに明確に把握していることがわかる（実際、「資本」という表現も用いられている）。

それについては、Ebenda, S. 236. 前掲訳書87頁を参照されたい。

次に、「疎外された労働」の第二規定で留意すべきことは、そこで古典派の労働観に対する批判がなされていることである。次に引用する一連の章句においては、古典派の労働観とマルクスの労働観との違いが明確に読みとれる。

「労働者は自分の労働において……幸福と感じずに不幸と感じ、自由な肉体的および精神的エネルギーをまったく発展させずに、かえって彼の肉体を消耗させ、彼の精神を頹廃化させる」、「労働していないとき、彼は家庭にいるように安らぎ、労働しているとき、彼はそうした安らぎをもたない。だから彼の労働は、自発的なものではなくて強いられたものであり、強制労働である」(Ebenda, S. 238. 前掲訳書91～92頁。カ点——マルクス、下線——引用者)。

このような労働観は、まさに古典派の労働観であり、労働を *toil and trouble* としてとらえていると言える。他方、マルクスの労働観は、下線部を肯定的な表現に直すことによって得られると考えてよかろう。すなわち、マルクスの場合、労働とは、「幸福」感が得られるものであり、「自由な肉体的および精神的エネルギー」を「発展させ」るものであり、「安らぎ」をもてるものであり、「自発的なもの」である。

とはいえ、マルクスの労働観は、古典派の労働観を単純に否定したものではなく、マルクスは、本質と現存在、普遍と特殊を自己疎外、自己矛盾として把握する方法<sup>1)</sup>によって古典派の労働観を批判しているのである。

その方法は、次のような表現で言いあらわされている。

「労働が労働者の本質に属していない」、「労働者は、……労働のなかでは自己の外にあると感じる」、「労働者の活動は、彼の自己活動ではない」(Ebenda, SS. 238～239. 前掲訳書91～92頁)。

従って、マルクスによる古典派労働観批判とは次のようなものだと言えよう。すなわち、それは、古典派の理解する労働、つまり *toil and trouble* としての労働が、労働一般<sup>2)</sup>の特殊歴史的な実存形態にすぎないこと、すなわち疎外された形態にすぎないことを把握することにほかならない。

さて、次に「疎外された労働」の第三規定では、以下の二点に注意する必要があるだろう。第一点目は、第三規定が第一規定と第二規定との総合の上に成り立っているという<sup>3)</sup>ことであり、第二点目は、〈人間からの類の疎外〉とは、〈人間にとって類生活が、個人生活の手段(あるいは生活手段)となること〉だということである。これらについての詳細は、ここでは省略する。

最後に、「疎外された労働」の第四規定を経て「私的所有」及び賃労働の導出がおこなわれる過程において注目すべきなのは、「資本家」という語が登場していることである（Ebenda, S. 244. 前掲訳書102頁）。このことから考えても明らかなように、「外化された労働」の、すなわち自然や自分自身にたいする労働者の外的関係の「産物」、「成果」、「必然的帰結」として導出された「私的所有」（Ebenda, S. 244. 前掲訳書102頁）は資本家的所有を意味しているのである。

さて、以上を総括すれば次のように言えよう。すなわち、「疎外された労働」断片においては、資本家対賃労働者という階級関係が、労働過程（特殊歴史的形態規定を伴った普遍的・一般的な人間史的過程としての労働過程）の帰結として再生産されていくことが把握されているという点がいまや明確になったわけである。

- 1) これについては、山本広太郎『差異とマルクス』青木書店、1985年、とくに47～91頁を参照されたい。
- 2) これは第三草稿における「労働一般」とは異なるものである。
- 3) 第一点目については、第三規定の導出の仕方を見れば明らかである（MEGA<sup>2</sup>, I/2, SS. 241～242. 前掲訳書97～98頁参照）。しかもこの点は、人間と自然との関係についてのマルクスの考え方に深く関わるものである。それについては、Ebenda, S. 240. 前掲訳書94～95頁を参照されたい。
- 4) 階級関係の「再生産」に関する叙述が、「疎外された労働」断片におけるマルクス自身の立場表明（分析対象の特定の社会システムへの限定）以来、再び登場するのは、「私的所有」と「外化された労働」との「相互作用」に言及している箇所である（Ebenda, S. 244. 前掲訳書102頁）。

## (2) 『ミル評註』

ここでも、〔3〕のために必要な限りで検討していくことにする。

マルクスは、私的所有者どうしの交換がどのようにして生じるのかを問うており、その答は、相手の私的所有者が所者しているが、自分は所有していないような事物に対する必要、欲求に求められている。そして、私的所有者どうしの交換によって私有財産と私的所有者との関係がどう変化するかということについて、次のように言われている。すなわち、二つの私有財産の各々が、一方の私的所有者に対して持つ「人格性」や「人格的な意味」を喪失し、他方の私的所有者に対して持つそれらを獲得するということである（MEGA<sup>2</sup>, IV/2, S. 454. 前掲訳書101～102頁）。

また、私的所有と私的所有との関係については次のように論じられている。つまり、私的所有と私的所有とが「等置され」、各々が他の私的所有を「代表するもの」、「代理

物」，「等価物」となって現象する。あるいは，ある自然生産物が「他の自然生産物の同等物」として現象する，と（Ebenda, S. 454. 前掲訳書102頁。力点——マルクス）。

さらに，マルクスは私的所有の自己自身との関係に言及する。まず，私的所有と私的所有とが「自己の他者の代理人」として相互に関係しあうのみならず，各々の私的所有が「自己自身」の「代理人」として相互に関係しあうということが述べられていることに注意したい。さらに注目したいのは，次のような表現である。——「自己自身との直接的統一においてあるかわりに，私的所有はいまでは他の私的所有にたいする関係として存在するにすぎない」（Ebenda, S. 454. 前掲訳書102頁。力点——マルクス，下線——引用者）。

ここで言われているのは，私的所有が「自己自身」と「直接的」に「統一」されていた状態が，いまや私的所有の＜自己自身との分離・分裂＞の状態に変わっており，従って，このような分離・分裂のもとで，言いかえれば＜疎外の内部で＞統一が実現されているにすぎなくなっているということである。

このような＜私的所有の自己自身からの疎外＞すなわち＜私的所有の自己自身との分離・分裂＞にかかわる一連の表現として次のようなものが挙げられる（ $\leftrightarrow$ は分離・分裂を，また $\equiv$ は分離・分裂の同じ極であることを示す。なお，以下の整理の仕方は，恣意的なものではなく，文脈にそったものである）。

◦「等価物としての私的所有の定在」

$\leftrightarrow$  「それ〔私的所有〕に固有の定在」

◦「私的所有の価値としての定在」

$\equiv$  「私的所有の特有の本質<sup>2)</sup>にとっては外的な」定在

$\equiv$  「私的所有それ自体」から「外化」された定在

$\equiv$  「私的所有のたんに相対的な定在」

$\leftrightarrow$  「私的所有の直接の定在」。

この中からいま二つの表現を取り出して，そのそれぞれを，『経哲草稿』「疎外された労働」断片中にある同様の表現と並べてみる。

(i) 「私的所有の特有の本質にとっては外的な」（私的所有の）定在。

「労働が労働者の本質に属していない」（MEGA<sup>2</sup>, I/2, S. 238. 前掲訳書91頁）。

(ii) 「私的所有それ自体」から「外化」された（私的所有の）定在。

「人間がそのなかで自己を外化する労働」（Ebenda, S. 238. 前掲訳書92頁）。

見られるように，自己疎外の主体は異なっているが，いずれの著作からの引用においても，ともに自己疎外が把握されている。このような把握の仕方に十分注意を払う必要

があると思われる。<sup>3)</sup>

さて、貨幣把握に移る前に、次の点を補足しておきたい。それは、「私的所有と私的所有との抽象的な関係」が「価値」と言われている点である（MEGA<sup>Q</sup>, IV/2, S. 448. 前掲訳書89頁。力点——マルクス）。この関係とは、言いかえるならば〈等価の関係〉のことなのだが、このあとで検討する貨幣把握とかかわらせて考えるならば、いま述べたマルクスの価値規定、すなわち「私的所有と私的所有との抽象的な関係」が「価値」とあるという規定には注意する必要があるだろう。

以上で価値把握を終えて、次に貨幣把握に移ることにしよう。ここでは、価値と貨幣との関係がどのように把握されているかという点に絞って述べてゆくことにする。

マルクスによれば、私的所有と私的所有との抽象的な関係が価値であり、さらに「価値の価値としての現実的な実存こそ貨幣である」（Ebenda, S. 448. 前掲訳書89頁。力点——マルクス）。このようにマルクスが述べる場合、「価値」は〈相手の価値を表すもの〉として、のちの『資本論』で用いられている語を用いれば〈等価形態〉（〈相対的価値形態〉の反対の極）として把握されていることがわかる。そして〈等価形態〉の中で〈一般的等価形態〉という特殊な形態にあるものが貨幣として把握されているのである。同様に、マルクスが次のように述べる場合もやはり〈一般的等価物〉としての貨幣の特質に言及していると言える。

「私的所有の私的所有にたいする社会的な関係ということがすでに、そこにおいて私的所有が自己自身から疎外されている関係である。だからこの関係の向自有的実存である貨幣は、私的所有の外化であり、私的所有の特有の人格的本性の捨象である」（Ebenda, SS. 448-449. 前掲訳書89頁。力点——マルクス）。

ここでは、〈私的所有の自己疎外態〉として「価値」が一般的に論じられているのではなく、〈一般的等価物〉としての貨幣を把握することが主要な関心事になっており、〈私的所有の自己疎外態〉を直接、貨幣として把握している。

以上見てきたことから次のように言えるだろう。すなわち、マルクスの『ミル評註』における貨幣把握と価値把握とは密接に関係しており、しかも、マルクスの主要な関心事は貨幣把握であって、価値と貨幣との関係が把握される場合、貨幣は〈等価形態〉<sup>4)</sup>の特殊な形態としての〈一般的等価形態〉<sup>5)</sup>にあるものとして把握されており、その場合、価値は〈等価形態〉として把握されているということである。

さて、『ミル評註』についての以上の考察を総括すれば次のように言えよう。——私的所有に基づく交換がおこなわれるようになると、人間が相互に欲求を補完し合う関係

が、疎外された形態となって現れる。それは具体的には、「私的所有と私的所有との抽象的な関係」としての価値の関係、等価の関係として現れるということである。この場合、価値は私的所有一般の特殊歴史的事実として把握されている。そして「価値の価値としての現実的な実存」が〈一般的等価物〉としての貨幣である<sup>8)</sup>。

最後に、[3]の予備作業としておこなってきた[2]での考察によってえられた事柄のうちとくに注意すべきものを指摘しておきたい。

まず、資本（『経哲草稿』『疎外された労働』断片では、「資本」と「私的所有」とは同義であった）が労働との関係で把握されていること、つまり階級関係として把握されていることに注目すべきであろう<sup>9)</sup>。

次に、価値把握が貨幣把握の一環としておこなわれていることに注目すべきであろう。

そして、これらの資本把握、貨幣把握および価値把握がいずれも疎外論的な把握として特徴づけられるということは改めていうまでもないだろう。

- 1) 『ミル評註』には私的所有者どうしの交換のほかにも、おそらく共同体間での交換に言及していると思われる箇所がある。それは次の箇所である。

「では、私的所有はなぜ貨幣態 [Geldwesen] にまで進まねばならぬのだろうか? というのはこうである。人間は社会的な存在 [geselliges Wesen] として交換にまで進まざるをえないし、また、私的所有を前提すれば、交換は価値にまで進まざるをえないからである」(MEGA<sup>2</sup>, IV/2, S. 448. 前掲訳書88頁。力点——マルクス)。

ここでは「私的所有を前提」しない場合の交換に言及している。

- 2) 『ミル評註』の中には、これに類似した表現として、次のようなものがある。

「私的所有の素材となっている対象の特有の本性 [Natur]」(Ebenda, S. 453. 前掲訳書100頁。力点——マルクス)。

「素材の本性 [Natur] や私的所有の特有の本性 [Natur]」(Ebenda, S. 456. 前掲訳書105頁)。

これらいずれの表現においても、「素材」面に言及されていることに注意せねばならない。本文中の「私的所有の特有の本質」という表現は、「素材」面をも含んだものとするのが妥当であろう。そしてのちに述べるように、「素材」は私的所有者の欲求と結びつけられているのである。

- 3) 例えば、同じ「外化された私的所有」という表現が用いられる場合でも、「外化」が〈譲渡〉を意味するときと、〈自己疎外〉を意味するときがあることに注意すべきである。後者の重要な例としては次のようなものが挙げられる。——「私的所有そのものは外化された私的所有という規定をうけることとなった」(Ebenda, S. 454. 前掲訳書101頁。力点——マルクス)。
- 4) 『ミル評註』において価値把握よりも貨幣把握の方がマルクスにとって主要な関心事であったことは、われわれが引用した箇所のみならず、例えば MEGA<sup>2</sup>, IV/2, SS. 447~452. 前掲訳書87~96頁5行目では、貨幣把握が他の何よりも主要なものとなっており、価値把握が

なされる場合でも、それは貨幣把握の一環としてなされていると言っても過言ではないだろう。

- 5) 貨幣の〈一般的等価物〉としての把握が、『経哲草稿』第三草稿「貨幣」断片での主要な内容となっていることは注目すべきことであろう。また、先に本文中で引用した『ミル評註』の中の次のような章句、すなわち、「価値の価値としての現実的な実存こそ貨幣である」という章句と類似した章句が「貨幣」断片中にも見られる。それは次のような一文である。——「実存しつつあり活動しつつある価値の概念としての貨幣」(MEGA<sup>Q</sup>, I/2, S. 438. 前掲訳書186頁)。
- 6) 『ミル評註』の中で言われている「内的所有の關係」(MEGA<sup>Q</sup>, IV/2, S. 454. 前掲訳書100頁)は私的所有者どうしの欲求の相互補完の關係のことである。そしてそれは〈素材〉面と関連づけられている。
- また、人間が相互に欲求を補完し合う關係が疎外された形態となって現れるという内容については、次のように述べられている。すなわち、「剰余生産」がおこなわれるようになると、人間「相互の間の補完」ということは「まるきり仮象」になるということである(Ebenda, S. 463. 前掲訳書113～114頁)。
- 7) マルクスが「私的所有」を疎外論的に把握する場合、商品交換社会における「価値」としての私的所有の定在は、私的所有一般の特殊歴史的なものとして把握されていることに留意すべきである。
- 8) 『ミル評註』におけるような価値および貨幣の疎外論的把握は、同じバリ時代に執筆された『ポアギュベール評註』にも見られる(MEGA<sup>Q</sup>, I/3, Berlin, 1932, S. 575. 杉原四郎・重田晃一共訳『経済学ノート』, 151頁参照)。

その箇所では重要なことは、ポアギュベールは「正当な価値」＝「商業価値」と考えているのに対し、マルクスは、「交換そのものが、私的所有の基礎の上に立って」いることを踏まえ、「価値」(＝「商業価値」)によって自然や人間からその「正当な価値」(≠「商業価値」)が奪われると考えており、マルクスの方がポアギュベールよりもより一般的・本質的な次元から価値把握をおこなっているということである。

なおまた、そこでの次のような論理、すなわち貨幣によって自然や人間からその「正当な価値」が奪われるという論理は、『ユダヤ人問題』においても見受けられ、表現も酷似している。その部分を最後に引用する。——「貨幣はあらゆる事物の普遍的な、独立的なかたちをとった価値である。だからそれは、全世界から、人間社会からも自然界からも、その固有の価値をうばってしまった」(Marx/Engels Werke, Band 1, Dietz Verlag, Berlin, 1956, S. 375. 『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻, 大月書店, 1959年, 411頁)。

- 9) このことに関連して、『経哲草稿』第二草稿から一文を引用する。——「土地としての土地、地代としての地代は、そこではその身分的差別を失い、何ごともいわぬ、あるいはむしろ貨幣のことはかりという資本と利子とになったのである」(MEGA<sup>Q</sup>, I/2, S. 250. 前掲訳書111頁。力点——マルクス、下線——引用者)。

ここから読みとれることは、「資本」という用語では価値的な側面の把握はなされておらず、「資本」を「貨幣」的なものとしてとらえ直すことによってはじめて、階級關係の側面と価値的な側面との統一の把握が可能になっている、ということである。

なお、「資本」という用語で、いわゆる資本制的階級關係以外の階級關係を表現する場合もある。この場合、「資本」は「私的所有」とおきかえることができる。その例としては第

二草稿中の次の一文を挙げることができる。

「資本から区別された土地所有は、なおまだ地方的な、そして政治的な偏見にとりつかれている私的所有、資本であり、なおまだ完全に世間とのかかわりあいから抜けでて自分自身へと復帰していない資本、なおまだ未完成的な資本である」（Ebenda, S. 255. 前掲訳書117頁。力点——マルクス、下線——引用者）。

### 〔3〕 初期マルクスにおける論理と歴史

——貨幣把握の特殊性とかわって——

#### (1) 『経哲草稿』「疎外された労働」断片における論理的方法

ここで示したいのは次の点である。すなわち、『経哲草稿』「疎外された労働」断片は、特定の社会システム（のちにマルクスによって確定される語を用いるとすれば資本制社会<sup>1)</sup>）に分析対象を限定した上で、その再生産的メカニズムを明らかにしようとしたものであるという点である。

以下ではこのことを、「疎外された労働」断片の〈歴史的発生論<sup>2)</sup>〉的理解から生じる〈循環論法説〉に対する批判という形で示そうと思う<sup>3)</sup>。

〈循環論法説〉とは次のようなものである。——マルクスは「疎外された労働」断片において、一方では「疎外された労働」が「私的所有」の「結果」であると述べているが、他方では「私的所有」が「疎外された労働」の「帰結<sup>4)</sup>」であると述べている。従ってマルクスは「疎外された労働」断片において「循環論法」に陥っている、というわけである。

われわれは、以下、このような〈循環論法説〉に対する批判を、次の二点に分けておこなうことにする。

(i) 「疎外された労働」が「私的所有」の結果であるということを、発生論的に理解することに<sup>5)</sup>に対する批判。

(ii) 「私的所有」が「疎外された労働」の帰結であるということを、〈歴史的発生論〉的に理解することに<sup>6)</sup>に対する批判。

われわれは、この(i)と(ii)との両方の批判をおこなってはじめて〈循環論法説〉を完全に批判しようと考えている。では、まず(i)から始めよう。

すでに述べたように、〔2〕では、「疎外された労働」断片が分析対象を特定の社会システムに限定した上で論理を展開したものであることを前提して叙述を進めていったが、いまやこのことについて詳細に検討せねばならない。

「疎外された労働」断片では、まず最初に国民経済学の「法則」の立場が批判され、独自の「概念的把握」の立場について、いくつかの例をとりあげて簡単な説明がなされる。そしてそのあとに、国民経済学者の説明の仕方に対する批判が続く。そして、それはそのすぐあとの、分析対象の特定の社会システムへの限定に関わる叙述と密接に関連している。従ってまず、国民経済学者の説明の仕方がどのように批判されているかということについて見ておくことにする。その批判とは次のようなものである。

「国民経済学者が説明しようと思うときにするように、ある架空の原始状態にわが身をおくようなことは、われわれはしない。このような原始状態は、なにごとをも説明しない。それはただたんに問題を、漠然として霧のかかったかたに追いやるだけなのである。国民経済学者は、論証すべき事柄、すなわち、たとえば分業と交換といった二つのもののあいだの必然的な関係を、事実とか出来事というかたちであらかじめ仮定しているのである。それは神学が悪の起源を墮罪によって説明するのと同様である。すなわち彼〔神学者〕は説明すべき事柄を一つの事実として、歴史というかたちで、あらかじめ仮定しているのである」(MEGA<sup>2</sup>, I/2, S. 235. 前掲訳書86頁)。

つまり、国民経済学者が、説明の際に「ある架空の原始状態にわが身をおく」ということ、「国民経済学者は論証すべき事柄……を、事実とか出来事というかたちであらかじめ仮定して」おり、そしてそれは、「説明すべき事柄を一つの事実として、歴史というかたちで、あらかじめ仮定している」神学者と同様の説明の仕方であるということがここで批判されているのである。

なお、ここで言われている国民経済学者や神学者の、「起源」を説明するというやり方には、「疎外された労働」断片の終わり近くで提出された二つの課題のうちの二つ目の課題中の次の箇所においても言及がなされている。

「われわれはすでに、私的所有の起源にかんする問題を、人類の発展行程にたいする外化された労働の関係という問題におきかえる [verwandeln] ことによって、この課題を解決するために多くのものを獲得してきた」(Ebenda, S. 246. 前掲訳書105頁。力点——マルクス)。

この中で言われているところの、「人類の発展行程にたいする外化された労働の関係という問題」はさておき、「私的所有の起源にかんする問題」には、先の引用箇所ですべられている国民経済学者に対する批判の形ですでに言及されていたと言ってよいだろう。

さて、国民経済学者の説明の仕方に対する以上のような批判に続いて、国民経済学者

のものとは異なるマルクス自身の立場について、説明がなされるのだが、それを検討する前に次の点に注意しておきたい。

われわれは、「私的所有の起源」を問うということがマルクスによって批判されていることをすでに見てきたわけだが、そのことから、「私的所有」の歴史的発生を問うことが拒否されていると考えるならば、それは誤りであろう。<sup>6)</sup>

ところで話をもとに戻して、国民経済学者のものとは異なるマルクス自身の立場がどのようなものであるかを見ていくことにする。国民経済学者の説明の仕方に対する批判のあと、マルクスはつづけて次のように書いている。

「われわれは国民経済上の現に存在する [gegenwärtig] 事実から出発する。／労働者は、彼が富をより多く生産すればするほど、彼の生産の力と範囲とがより増大すればするほど、それだけますます貧しくなる。労働者は商品をより多くつくればつくるほど、それだけますます彼はより安価な商品となる。事物世界の価値増大にびったり比例して、人間世界の価値低下がひどくなる。労働はたんに商品だけを生産するのではない。労働は自分自身と労働者とを商品として生産する。しかもそれらを、労働が一般に商品を生産するのと同じ関係のなかで生産するのである」(Ebenda, S. 235. 前掲訳書86頁。力点——マルクス、下線——引用者)。

ここでは「国民経済上の現に存在する事実から出発する」マルクス自身の立場が表明され、「国民経済上の現に存在する事実」についてそのあとで続けて説明がなされている。その説明の中でとりわけ注意すべきなのは引用文中、下線を引いた箇所の中の二つ目と三つ目の箇所であろう。これらの箇所から次のように言えるだろう。

たしかに、「労働者」や「労働」が「商品」であると考えられており、〈労働力〉という用語がまだ確立されていないという限界はある。しかし資本—賃労働関係の再生産がそれなりに把握されていることは明らかである。この引用文に続いて「疎外された労働」の四つの規定の導出がおこなわれるわけだが、それに先立ってこのような分析対象の特定の社会システムへの限定がなされていることは重要である。<sup>7)</sup>

さて、分析対象の特定の社会システムへの限定に関する叙述のあと、「疎外された労働」の四つの規定の導出が続くが、それは次のような叙述から始まっている。

「さらにこの事実は、労働が生産する対象、つまり労働の生産物が、ひとつの疎遠な本質として、生産者から独立した力として、労働に対立するという<sup>8)</sup>ことを表現するものにはかならない」(Ebenda, S. 236. 前掲訳書87頁。力点——マルクス、下線——引用者)。

ここで「この事実」と言われているのは、いうまでもなく先の引用箇所<sup>8)</sup>で説明されて

いた「国民経済上の現に存在する事実」のことである。ここでは、それが言いかえられているのだが、ここで述べられていることは、後出の次のような叙述、すなわち「これまでわれわれは、ただ一つの側面、すなわち労働者の、彼の労働の諸生産物にたいする関係からだけ、労働者の疎外、外化を考察してきた」（Ebenda, S. 238. 前掲訳書91頁。カ点—マルクス）という叙述を経て、「疎外された労働」の第一規定へと続くのである。

従って、前掲の分析対象の特定の社会システムへの限定に関する叙述から、いま引用した一文を経ていわゆる「疎外された労働」の第一規定が述べられるまでの論理展開は、なんら発生論的なものではなく、特定の社会システムに関して最初に言われていたことが、「疎外」概念を用いて表現し直されてゆく過程であることは明らかである。

さらに、「疎外された労働」の第二、第三および第四規定が導出されてゆく過程に関しては、次のように言えるだろう。

まず第二規定は、マルクスの次の叙述、すなわち「労働の対象の疎外においては、ただ労働の活動そのものにおける疎外、外化が要約されているにすぎないのである」（Ebenda, S. 238. 前掲訳書91頁）という叙述からもわかるように、〈労働過程の結果〉、すなわち「生産の結果」（Ebenda, S. 238. 前掲訳書91頁）における疎外に関して述べたあと、〈労働過程の内部〉、すなわち「生産の行為」、「生産的活動そのものの内部」（Ebenda, S. 238. 前掲訳書91頁）における疎外へと、直接の考察対象を変えることによって導出されたものである。そして、第一規定と第二規定とは「二つの側面」からの疎外として述べられており、第一規定はそのうちの「一つの側面」であると述べられている。このようなマルクスの表現にも留意するならば、第一規定から第二規定への展開を「下向的分析」と特徴づけることは、あまり意味がないのではないだろうか。それはともかくも、第二規定の導出についてこれまで述べたことから、第二規定の導出に関しても、なんら発生論的な論理展開がなされていないことは明らかであろう。

次に第三規定は、〔2〕で述べたように、第一規定と第二規定との総合の上に成り立っているものである。従って第三規定とそれ以前に述べられた第一規定や第二規定との間にもなんら発生的な連関を読みとることができないのは明らかである。

最後に、第三規定と第四規定との関係については、次に引用する箇所を簡潔に言い表されている。

「一般に、人間の類的本質が人間から疎外されているという命題は、ある人間が他の人間から、またこれらの各人が人間の本質から疎外されているということ、意味している。／人間の疎外、一般に人間が自分自身にたいしてもつ一切の関係は、人間が他の

人間にたいしてもつ関係において、はじめて実現され、表現される」（Ebenda, S. 242. 前掲訳書98頁）。

ここでは、「人間が自分自身にたいしてもつ」関係としての疎外と、「人間が他の人間にたいしてもつ関係」としての疎外とについて、前者は後者を「意味」しており、前者は後者において「実現され、表現される」と述べられている。

このことから明らかなように、第三規定と第四規定との間にもなんら発生的な連関を読みとることはできないのである。

さて、「疎外された労働」の四つの規定の導出に関する考察を終えたいま、もはや次のことは明らかであろう。すなわち、分析対象の特定の社会システムへの限定に関する叙述から「疎外された労働」の四つの規定を導出し終わるまでの論理展開は、すこしも発生論的なものではないということである。従って〈循環論法説〉に対する批判(i)は今や果たされたと言えるだろう。

また、〈循環論法説〉に対する批判(ii)も、これまで考察してきたことから、事実上果たされている。改めて述べるならば、次のようになるだろう。

すなわち、「疎外された労働」断片において、「疎外された労働」の四つの規定が導出されるのに先立って、国民経済学者のものとは異なるマルクス自身の立場の表明、すなわち分析対象の特定の社会システムへの限定がなされているのだから、「疎外された労働」の四つの規定はこの特定の社会システムに関して言われているものである。従ってまた、「私的所有」が「疎外された労働」の帰結として導出される過程は、「私的所有」が存在しない状態から「私的所有」が生じる歴史的発生過程では決してありえないのである。

以上からして、〈循環論法説〉に対する批判は果たされたと言いうるだろう。

- 1) 『経哲草稿』で「資本制社会」という用語が用いられていないことは周知のとおりである。
- 2) これについては〔1〕の注1)を参照されたい。
- 3) 付け加えて言えば、われわれは『経哲草稿』「疎外された労働」断片を発生論的な叙述として特徴づけることに対しても疑問を持っている。むしろ、国民経済学のおこなった分析をよりいっそう徹底したこと（そしてそのことは「概念的把握」の一環をなしているのだが）に、この断片の主要な意義があるのではなからうか。
- 4) ここで「結果」と「帰結」とを区別したのは、「疎外された労働」断片中のマルクス自身の表現に従ったためである（MEGA<sup>2</sup>, I/2, S. 244. 前掲訳書102頁参照）。
- 5) 「疎外された労働」断片を〈歴史的発生論〉的に理解する〈循環論法説〉の場合、(i)に関する限りは、発生論的理解であるということにとどまらざるをえない。というのは、「疎外された労働」が「私的所有」の結果であるということ「疎外された労働」が「私的所有」

によって引き起こされるというように発生論的に理解する場合でも、「疎外された労働」論が「私的所有」を前提した叙述であると考えていることには違いないのであり、従ってその場合、「私的所有」→「疎外された労働」という展開は＜歴史的発生論＞的に理解されているとは言えないからである。

- 6) このような見解をとる代表者としては服部文男氏を挙げるべきであろう。氏の見解については次の著書を参照されたい。『マルクス主義の形成』青木書店、1984年（とくに162～167頁）。
- 7) 「疎外された労働」断片におけるこのような分析対象の特定の社会システムへの限定は『ヘーゲル国法論批判』における「独自の対象の独自の論理を把握する」(Marx/Engels Werke, Band 1, S. 296. 『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻, 大月書店, 332頁) ことと深く関わるものであり、しかもそのような把握はヘーゲルの「概念的把握」、すなわち「いたるところで論理的概念の諸規定を再認識」するような「概念的把握」とは異なるマルクス独自の「概念的把握」を特徴づけるものの一つとして力説されている (Ebenda, S. 296. 前掲訳書332頁)。

## (2) 『ミル評註』における歴史的発生論

ここで示したいのは次の点である。それは、『ミル評註』において、貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論<sup>1)</sup>）が展開されているという点、すなわち貨幣が資本制に固有なものとして生成してくると把握されている点である。

なお、『ミル評註』は、そのすべてにわたって歴史的発生が叙述されているわけではないので、本稿で取り扱うのは、私的所有の外化→価値と展開し、さらに営利労働、分業、貨幣を論じている箇所 (MEGA<sup>2)</sup>, IV/2, SS. 453～459. 前掲訳書98～106頁) に限ることとする。

まず最初に明らかにしたいのは、単純商品生産者を想定していることが明確に読みとれる箇所が『ミル評註』のなかに存在しているということである。このことを示すため、次に二つの文章を引用し、検討することにしよう。

「……このようにして、おのおのは、自分の私的所有の一部をそれぞれの他者に外化するのである」(Ebenda, S. 454. 前掲訳書100頁。下線——引用者)。

「外化された私的所有のあの原初的の姿態、すなわち交換取引のあの原初的の姿態にあっては、私的所有者の双方は、かれの欲求、かれの資質、かれの手もちの自然的素材が直接にかれをかりたてて生産にむかわせたものを、それぞれ生産したのである。だから各人は、かれの生産物の剰余分だけを、他者と交換するにすぎない」(Ebenda, S. 455. 前掲訳書103頁。力点——マルクス、下線——引用者)。

まず上掲第一の文章は、私的所有者どうしの交換がどのようにして生じるのかという

問題提起とそれに対する回答（それは各々の私的所有者の、相手の私有財産に対する欲求に帰着させられているが）とがなされたあとで、それらを受けて述べられたものである。第二の文章のほうは、次のような叙述のあとで言われている。その叙述とは、「交換の関係を前提すると、労働は直接的営利労働になる。疎外された労働のこの関係は、つぎの事態を通じてはじめて頂点に達する」として、そのような事態を二点に分けて説明したものである。そして、こうした「疎外された労働のこの関係」が「頂点に達する」ような状態と対比させて、さきに引用した二つの文章のうちの後者において、「外化された私的所有のあの原初的の姿態、すなわち交換取引のあの原初的の姿態」に関する叙述がなされているわけである。

さきに引用した二つの文章がどういう文脈で述べられているかを以上のように押さえた上で、これらの所論に関していまいし検討をおこなっておくことにしよう。

これらの所論について注意すべき点は、各々の私的所有者が自分の私有財産、あるいは自分の生産物のすべてを相手のものと交換するのではなく、「一部」、あるいは「剰余分」だけを相手のものと交換すると述べられていることである。この点に注意するならば、これら二つの引用文で想定されている交換が単純商品生産者どうしの交換であることは明白だと言えるであろう。

さて、マルクスは、さきの第一の引用文の少しあとで、私的所有の外化に関して論理を展開し、価値を導出する。

ここでわれわれが問題にしたいのは、それに続く次のような箇所である。

「交換の関係を前提すると、労働は直接的営利労働になる。疎外された労働のこの関係は、つぎの事態を通じてはじめて頂点に達する。すなわち、(1)一方では、営利労働が、したがって労働者の生産物が、どうみても彼の欲求、かれの労働の規定と直接の関係をもって、欲求と労働の規定性というこの二つの側面で、それらが労働者に疎遠な社会的連絡 [Kombinationen] によって規定されていること。(2)生産物を買うものが自分では生産しないで他人が生産したものを交換取引すること……」(Ebenda, S. 455. 前掲訳書 102~103頁。力点——マルクス、下線——引用者)。

ここでは「交換の関係を前提」した場合の労働、すなわち「直接的営利労働」という「疎外された労働のこの関係」が、「頂点に達する」ような場合について考察が進められていることがわかる。つまり、商品生産社会一般の特殊な発展した形態について述べられていることがわかる。さらに、「(2)生産物を買うものが自分では生産しないで他人が生産したものを交換取引すること」という箇所に注意するならば、いま述べた<商品生

産社会一般の特殊な発展した形態」というのが資本制社会に相当することが明らかになる。

さて、『ミル評註』の論理展開の仕方についてさらに検討を進めてゆく前に、上掲引用文中の「営利労働」というカテゴリーについての検討をここでおこなっておきたい。そこで以下、「営利労働」を特徴づけていると思われる文章をいくつか選んで引用しておくことにする。

(i)「交換によって、かれの労働は部分的に営利の源泉になってしまった。労働の目的と定在とは別のものとなってしまったのである。生産物は価値、交換価値、等価物として生産されるのであって、もはや生産者にたいする直接の・人格的な関係のために生産されるのではない。生産が多面的になればなるだけ、したがって、一方では生産者の欲求が多面的になればなるだけ、他方では生産者の仕事が一面的になればなるだけ、それだけいっそうかれの労働は営利労働の範疇に包括され、ついには労働はもはやこのような意味しかもたなくなって……」（Ebenda, S. 455. 前掲訳書103頁。下線——引用者）。

(ii)「等価物は、等価物としての自己の実存を、貨幣において受けとる。いまや貨幣が営利労働の直接の結果であり、交換の仲介者である」（Ebenda, S. 456. 前掲訳書105頁。下線——引用者）。

まず、(i)の引用文は、二人の私的所有者が各々の生産物の剰余分だけを相手と交換するにすぎないと言われている箇所のおそらくと述べられている。従って、(i)のはじめの箇所、すなわち「交換によって、かれの労働は部分的に営利の源泉になってしまった」（下線——引用者）という箇所は、私的所有者の生産物のうち交換に出す部分、つまり剰余分のみが営利の源泉になるということをおさえた上で、労働の「営利」労働化を「部分的」なものとして述べたものであることがわかる。

このように、「交換」によってともかくも労働が「営利労働」化することは、さきの引用文の冒頭部分、すなわち「交換の関係を前提すると」に始まる部分でも言われている。

さらに、(i)ではそういう労働が、次のような場合の労働として、すなわち生産物が「価値、交換価値、等価物」として生産される場合の労働として特徴づけられている。従って(i)では、「価値、交換価値、等価物」として生産物が「交換」される場合に、その生産物を生産するための労働が「営利労働」になるということが述べられているのである。

次に、(ii)の引用文についてであるが、まず、「等価物は、等価物としての自己の実存

を、貨幣において受けとる」という部分については、〔2〕で明らかにした次のことを踏まえて理解すべきである。すなわち、『ミル評註』においては価値把握よりも貨幣把握の方に強い関心が示されており、価値と貨幣との関係が把握される場合、貨幣は＜等価形態＞の特殊な形態としての＜一般的等価形態＞にあるものとして把握されており、この場合、価値は＜等価形態＞として把握されているということである。

そしてそのような＜一般的等価物＞としての「貨幣」が「営利労働の直接の結果」であると述べられているのである。

従って(ii)からわかることは、(i)でその意味を与えられていた「営利労働」、すなわち「価値、交換価値、等価物」として生産物が「交換」される場合の労働は、＜一般的等価物＞たる「貨幣」の出現によって、より明確な姿で現象するということである。さきの引用文で言われていた次のような事態、すなわち「直接的営利労働」が「頂点に達する」ような事態（そしてそれは資本制社会における事態であったわけだが）も、このことと結びつけば、その意味がより明確になるであろう。その際、『ミル評註』においては貨幣が資本制に固有なものとしてとらえられているという点（これについてはあとで詳述する）に注意する必要があると思われる。

最後に、「営利労働」を特徴づけていると思われる文章をもうひとつだけ引用する。

(iii)「交換が生じるや否や、占有の直接的限度をこえる剰余生産が生じる。だが、この剰余生産も利己的な欲求を決して超越するものではない。それどころか、剰余生産はある種の欲求をみたすための間接的な方法にすぎないのであって、ただこのような方法がとられるのは、そこでは、この欲求が直接に自己の生産の中にその対象化をみいださず、他者の生産の中にこれをみいだすがためである。生産は営利の源泉に、営利労働になってしまった。だから第一の関係では、欲求が生産の尺度であったのに、これに反して、第二の関係では、生産が、あるいはむしろ生産物の占有が、どの程度欲求の充足が可能かを示す尺度である」(Ebenda, S. 462. 前掲訳書111～112頁。力点——マルクス、下線——引用者)。

ここで言われている「第一の関係」と「第二の関係」との区別について、まず説明しておきたい。この引用文では「交換」が生じたあとのことが述べられており、これに「第二の関係」が対応させられている。他方、「第一の関係」についてはこの引用文の前の部分で述べられている。そして簡単に言えば、この「第一の関係」は、人間が自分の欲求に応じて生産するような、「未開で野蛮な状態」に対応させられている。

このことを前提した上で、「営利労働」がどのように特徴づけられているかを見てゆ

くことにする。ここではまず、「交換」が生じると、それと共に「剰余生産」が生じることが述べられている。しかも「剰余生産」は、その生産者の直接的な欲求の対象ではなく、他者の生産物を得るための「間接的な方法」にすぎないことが指摘されている。「生産は営利の源泉に、営利労働になってしまった」と述べられているのは、直接には、このことを指して言われている。そのあとで、ひき続き「第一の関係」と「第二の関係」について言及されるわけであるが、ここで言われているのは、欲求に応じて生産がおこなわれていた状態から、「生産物の占有」に応じて欲求の充足が可能になるような状態に変化するということであり、しかもそれが交換によって生じるということである。

以上のことから、ここでは「営利労働」が次のようにとらえられていることがわかる。すなわち、「交換」によって「剰余生産」が生じるのだが、それは他者の生産物を得るための「間接的な方法」にすぎないのであり、「生産物の占有」の程度に応じて欲求の充足が可能であるような状態が生じるということである。そしてこのような場合に労働が「営利労働」化するとされているのである。

このように、引用文(iii)においてもやはり、(i)と同様に、交換によって労働が「営利労働」化することが述べられているわけである。ただ、ここではそれが、交換が生じる以前の状態と対比させて述べられており、しかもそのような労働の「営利労働」化が、生産と欲求の関係として（すなわち、どちらが尺度になるかということについて）述べられていることが特徴的である。その意味では、この引用文(iii)は「営利労働」の本質をよく言いあらわした叙述であるといつてよからう。

ところで、以上で「営利労働」に関する検討を終え、ひき続き『ミル評註』において単純商品生産から資本制への展開がどのようになされているかを見てゆくことにしよう。

さきに見たように、『ミル評註』では「直接的営利労働」が「頂点に達する」ような事態が二点に分けて説明された（本誌126頁）あと、「営利労働」につねにひそんでいる事態が四点に分けて説明され（Ebenda, S. 455. 前掲訳書104頁）、さらにその少しあとで、次のように論述されている。

「人間的活動の生産物の相互的な交換が交換取引、暴利商業となって現象するように、活動そのものの相互的な補完と交換とは分業 [Teilung der Arbeit] となって現象する。分業は人間をとことんまで抽象的な本質 [Wesen] に、つまり施盤などにしてしまい、ついにはかれを精神上、肉体上の不具者に変えるのである」（Ebenda, S. 456. 前掲訳書104頁。力点——マルクス、下線——引用者）。

こうした所論は『経哲草稿』第一草稿前段の「労賃」欄における次のような叙述と内

容的に重なっていると言えるだろう。

「資本の集積は分業を拡大させ、分業は労働者の数を増大させる。また逆に、労働者の数は分業を拡大させ、同様に分業は資本の集積を増進させる。一方でこの分業と他方で資本の集積とともに、労働者はますます一途に労働に、しかも特定の、きわめて一面的な、機械的な労働に、依存するようになる。こうして労働者は、精神的にも肉体的にも機械にまで下落させられ、ひとりの人間から一個の抽象的活動および一個の胃袋となる……」（MEGA<sup>®</sup>, I/2, SS. 197～198. 前掲訳書21～22頁。下線——引用者）。

これら両方の所論の対応からも、『ミル評註』からの引用文中の「分業」は工場内分業と考えるのが適切であろう。

それはともかく、『ミル評註』では上の引用文のすぐあとで次のように主張される。

「分業を前提すれば、その場合には、私的所有の素材をなす生産物は、個々人にとってますます等価物であるという意義を受け取る。そして個々人はもはや自己の剰余分を交換するのではなくて、かれの生産の対象がなんであるかには全く無関心になりうるが、それと同様に、かれはもはやかれの生産物を自己の必要とする事物 [Wesen] と直接には交換しない。等価物は、等価物としての自己の実存を、貨幣において受けとる。いまや貨幣が営利労働の直接の結果であり、交換の仲介者である」（MEGA<sup>®</sup>, IV/2, S. 456. 前掲訳書105頁。力点——マルクス、下線——引用者）。

この引用文中の「分業を前提すれば」という表現は、さきに引用した文章冒頭の「交換の関係を前提すると」という表現と対比させて理解する必要がある。そのことを考慮すれば、ここで言われている分業は工場内分業であると理解すべきだろう。

また、「個々人はもはや自己の剰余分を交換するのではなくて」という箇所から、ここで言われている「交換」が単純商品生産者どうしの交換ではなく、資本制的商品生産者どうしの交換であることが明らかになるといえよう。

従って、上述のことからすれば、すぐ上の引用文の「貨幣」は、次のようなものとして、すなわち資本家によってより多くの獲得が目指されているものとして、つまり資本制的なものとして考えられていると言えるのではなからうか。

さて、マルクスは、いま問題にした引用文に続けて次のように力説する。——「いまや貨幣において、つまり素材の本性や私的所有の特有の本性にたいして、またさらに私的所有者の人格性にたいしてもまったく無関心なものたる貨幣において、疎外された事物の人間にたいする完全な支配が出現している」（Ebenda, S. 456. 前掲訳書105頁。力点——マルクス、下線——引用者）。

ここで注目すべきなのは、貨幣において、疎外された事物の人間にたいする「完全な」支配が出現していると言われていることである。このことと、一つ前の引用文について述べたことから、やはりここでの「貨幣」も資本家によってより多くの獲得が目指されているものとして、だからまた資本制に固有なものとして考えられていると言えるのではなかろうか。そしてこの点は、さきにも述べた、この当時のマルクスの資本（私的所有）把握と貨幣・価値把握とのあり方（本誌118頁参照）にも関わっていると思われる。

さて、『ミル評註』において貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論）が展開されているという点を示すためにこれまで引用し、検討してきた内容を総括して、次のように述べられている。——「むろん、国民経済学はこの発展全体を単なる一箇の事実として、つまり偶然的な必要の所産としてしか把握できない」（Ebenda, S. 456. 前掲訳書105頁）。

この箇所は、『経哲草稿』「疎外された労働」断片における次のような叙述と同じ問題意識に基づいているように思われる。

「……国民経済学は、自分が説明すべきものをあらかじめ仮定しているのである。同様に、競争がいたるところで引き入れられるが、それは外的な諸事情から説明されている。この外的な、みだところ偶然的な諸事情が、どの程度まで必然的発展の表現にほかならないか、そのことについて国民経済学は、われわれになにも教えない。われわれが見てきたように、国民経済学にとっては、交換でさえも偶然的な事実として現われるのである。……競争、営業の自由、土地占有の分割などは、独占、同業組合および封建的所有の必然的な、不可避の、自然的な諸帰結としてではなく、偶然的な、故意の、強引な諸帰結としてしか展開されず、またそのようなものとしてしか把握されなかったからである」（MEGA<sup>②</sup>, I/2, S. 235. 前掲訳書85頁。下線——引用者）。

以上、われわれは『ミル評註』について、歴史的発生の叙述という観点から検討してきたのだが、こうした検討を終えたいま、次のことが論証されたとと言えるだろう。——『ミル評註』においては、貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論）が展開されているということ、すなわち、そこでは貨幣が資本制に固有なものとして生成してくると把握されていること。

1) これについては[1]の注1)を参照されたい。

### (3) 両者の関連

これまでの考察から、初期マルクスにおける論理と歴史の交錯が示されたわけだが、ここではさらに、両者（論理と歴史）が初期マルクスの著作において不可分に結びつい

ているという点を明らかにせねばならない。

具体的に言えば、『経哲草稿』「疎外された労働」断片から、『ミル評註』のうち歴史的発生を叙述している部分（以下、『ミル評註』における限定箇所と呼ぶ<sup>1)</sup>）への必然的な連続性（マルクス自身の問題意識においてそれらが連続しているということ）を示すのがここでの課題である。

以下、それについての根拠を二点ばかり挙げることにする。

まず、「疎外された労働」断片終わり近くの次の文章に着目したい。

「われわれが疎外された、外化された労働の概念から分析を通じて私的所有の概念をみつけたしてきたように、これら二つの要因の助けをかりて、国民経済学上のすべての範疇を展開することができる。そしてわれわれはたとえば掛値売買、競争、資本、貨幣といった各範疇において、ただこれら二つの最初の基礎の限定された、そして展開させられた表現を、再発見するだけであろう。／しかしわれわれは、こうした形態[Gestaltung]を考察するまえに、さらに二つの課題の解決を試みよう」(MEGA<sup>2)</sup>, I/2, S. 245. 前掲訳書104頁。力点——マルクス、下線——引用者)。

この引用文のうち最初の段落で述べられていることを「貨幣」に関して要約するならば、次のようになるであろう。すなわち、「疎外された、外化された労働の概念」およびそこから導出された「私的所有の概念」という「二つの要因の助けをかりて」、「貨幣」を展開することができる。そして「貨幣」においては、「ただこれら二つの最初の基礎の限定された、そして展開させられた表現を、再発見するだけ」であろう。

およそ以上のようにならう。次にあとの段落を見ると、「貨幣」は「こうした形態」のうちの一つとされているが、文脈から判断すれば、それは、「貨幣」が「私的所有」の一形態であるという意味に解せるのではないか。そして、そのようなものとして「貨幣」を把握した上でさらに、「貨幣」の存在下での労働を「疎外された、外化された労働」の一形態として把握することが意図されていると言えるのではあるまいか。

これらのことを踏まえた上で、『経哲草稿』「疎外された労働」断片から『ミル評註』における限定箇所への連続性について検討することにしよう。まず、「貨幣」を「私的所有」の一形態として把握するという点に関して言えば、これは、『ミル評註』における限定箇所となされている、「私的所有」からの「貨幣」の導出に対応しており、しかもそのような導出は、限定箇所における主要課題であった。そして、このことは、パリ時代(1843年末から1845年はじめにかけて)のマルクスの他の著作中ではなされていないと考えるのが妥当ではあるまいか。

次に、「貨幣」の存在下での労働を「疎外された、外化された労働」の一形態として把握するという点に関して言えば、まず留意しなければならないのは次のことである。それは、本誌126頁で『ミル評註』から引用した箇所において、「直接的営利労働」が「疎外された労働のこの関係」と言いかえられていることである。次に留意しなければならないのは、本誌130頁での『ミル評註』からの引用文において言われている次のこと、すなわち「分業を前提」した場合に（そしてここで「分業」が工場内分業であることはすでに指摘しておいたが）、「営利労働の直接の結果」として「貨幣」が出現すること（そして、ここで「貨幣」が資本制に固有なものとして述べられていることもすでに指摘しておいたが）である。いま述べた二点を考慮するならば、次のように言えるだろう。——『ミル評註』における限定箇所では、「疎外された、外化された労働」は「直接的営利労働」あるいは「営利労働」と言いかえられるものだと考えられていて、そのような労働の発展した一形態として〈工場内分業〉が把握されており（資本制社会においては「営利労働」が「頂点に達する」、と言われていた）、しかも、〈工場内分業〉を「前提」した場合には、「営利労働」の「直接の結果」として「貨幣」が出現すること、したがって、〈工場内分業〉が「貨幣」（先述のように、資本制に固有なものと考えられている）の存在下での労働であることが把握されている、と。

従って、いまや次のことは明らかであろう。すなわち、『ミル評註』における限定箇所では、「貨幣」の存在下での労働が「疎外された、外化された労働」の一形態として把握されている、と。そしてこのような把握も、パリ時代のマルクスの他の著作中ではなされていないと判断できるのではなかろうか。

以上が、一つ目の根拠である。

続いて着目したいのは、先に一つ目の根拠を挙げるために引用した一文の最後で言われていた「二つの課題」のうちの第二の課題である。その課題とは次のようなものである。

「われわれは労働の疎外を、その外化を、一つの事実として受けとり、そしてこの事実を分析したのであった。そこでわれわれは問おうとする。どのようにして人間は自分の労働を外化し、疎外するようになるのか、と。どのようにしてこの疎外は、人間的発展の本質のうちに基礎づけられるのか。われわれはすでに、私的所有の起源にかんする問題を、人類の発展行程にたいする外化された労働の関係という問題におきかえることによって、この課題を解決するために多くのものを獲得してきた。なぜかといえば、私的所有について語る場合、人間の外部にある事物と関わり合っていると信じられている

からである。だが労働について語る場合、ひとは直接に人間そのものに関わり合っている。この新しい問題提起は、すでにその解決をふくんでいる」（Ebenda, SS. 245～246. 前掲訳書105頁。力点——マルクス、下線——引用者）。

この第二の課題では二つのことが問われているのだが、以下の考察で「課題」という場合、下線をほどこした部分のみを指すものとする。

まず、この課題が、通説のようにのちの〈本源的蓄積論〉によって答えられると考えることの正否が問われなければならない。それについてはなお検討の余地があると思われるが、ここでは、この課題が、通説のようにのちの〈本源的蓄積論〉によって答えられると考えることに対する疑問点を述べ、さらに、これ以外の解釈が可能であることを示したい。

この課題の解釈に際して留意すべき点は次のことであろう。すなわち、この課題においては、人間の労働の疎外が人間自身の発展行程との関係でとらえられており、しかも人間の外部にある事物に関する問題がわざわざ人間自身の問題として設定し直され（＝「おきかえ」られ）ているということである。このことから考えれば、この課題が、体制的な外的暴力による歴史の一過程を論じたもの、すなわち〈本源的蓄積論〉によって答えられると考えることに対しては疑問が残らざるをえない。

それでは、これに代わる解釈としてどのような解釈が可能であろうか。この点についてのわれわれの見解を述べる前に、本稿とは異なった見解をまず検討しておきたい。それは、この課題が資本関係の再生産に関するさらなる究明によって答えられるとする見解である。そして、この見解をとる代表者としては服部文男氏を挙げるべきであろう。<sup>2)</sup>

さきに引用した課題が、のちの〈本源的蓄積論〉によって答えられたとする通説の検討の際と同じく、ここでもやはり次のことに留意すべきである。それは、この課題において、人間の労働の疎外が人間自身の発展行程との関係でとらえられているということである。しかも、この課題においては「私的**所有の起源**にかんする問題」が「人類の発展行程にたいする**外化された労働**の関係という問題」にすでに「おきかえ」られている点が述べられている。この「おきかえ」は当然、「外化された労働」概念なしには不可能なのだから、それは「疎外された労働」断片でなされたと考えるよりほかはない。ところが、すでに述べたように、この断片では、マルクスは国民経済学者よりもいっそう分析を徹底させることによって、古典派の理解する労働、すなわち *toil and trouble* としての労働が労働一般の特殊歴史的な実存形態にすぎないこと、すなわちその疎外された形態にすぎないことを把握したのであった。だとすれば、いま述べた「おきかえ」は、

「私的・所有の起源にかんする問題」の次のような問題へのおきかえと考えるよりほかはないだろう。その問題とは、〈一般的（普遍的）な人間史〉としての「人類の発展行程」にたいする〈特殊歴史的な人間労働〉としての「外化された労働」の「関係」という問題である。以上のことから、さきに引用した課題においてはもっぱら私的・所有下のことが問題になっており、その問題が資本関係の再生産に関するさらなる究明によって答えられるとする見解を取りえないことは当然であろう。

では最後に、この課題についての私見を述べておくことにしよう。結論から言うならば、われわれはこの課題が、『ミル評註』における貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論）、すなわち貨幣が資本制に固有なものとして生成してくるという論理によって答えられようとしていると見るのが、最も適切ではないかと考えている。この点についてはなお検討の余地があるが、われわれの考えるところを以下、簡単に述べておくことにする。さきの課題中で述べられている、問題の「おきかえ」については、およそ次のように推測できよう。——資本制に固有なものとして貨幣が発生してくる必然性を把握するため、私的所有者どうしの交換の発生から出発するということ（そしてこれは「必要、欲求」から生じるとされていた）。いいかえれば、人間自身の発展行程の問題として設定し直すということ。

その上で、『ミル評註』における上述の論理、すなわち私的・所有→価値→貨幣という歴史的発生の論理が展開され、資本制に固有なものとしての貨幣が導出される。

以上のような推定も可能ではなからうか。<sup>3)</sup>

- 1) 本誌125頁を参照されたい。
- 2) 服部氏の見解については次の著書を参照されたい。『マルクス主義の形成』青木書店、1984年（とくに162～167頁）。
- 3) さきに引用した課題のあと、「疎外された労働」断片の終わりまでの部分では、非労働者としての私的所有者と労働生産物との関係について論及されており、このことから考えても、本稿でのわれわれの推定は可能であると思われる。

他方、『ミル評註』における貨幣の歴史的発生の論理が、主として階級関係に関わる叙述、すなわち労働と資本と土地所有の分裂、労働と労働との・資本と資本との・土地所有と土地所有との分裂、労働と労賃との・資本と利得との・利得と利子との・土地所有と地代との分裂、といった一連の「自己疎外」と「相互疎外」を中心とした叙述（Vgl. MEGA<sup>2</sup>, IV/2, SS. 456～459. 前掲訳書105～106頁参照）でしめくられていることもまた、課題についての私見を可能ならしめるものと考えられる。ただし、この部分はエンゲルスの『国民経済学批判大綱』からの影響を受けている可能性があることも踏まえておく必要がある。そして、その影響の有無は執筆順序問題と関わっているので、本稿ではそのことについては立入ることができない。

## 〔4〕 む す び

以上、われわれは、貨幣把握の特殊性への着目を通じて、初期マルクスにおける論理と歴史の交錯、さらには論理と歴史の不可分な結びつき、といった点を明らかにしてきた。

具体的には、まず、『経哲草稿』「疎外された労働」断片が論理的方法に基づいて書かれていることを明らかにし、次に、『ミル評註』において貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論）、すなわち、貨幣が資本制に固有なものとして生成してくるという論理が展開されていることを明らかにし、最後に、これら二つの著作が不可分に結びついていること、すなわち、「疎外された労働」断片が『ミル評註』に、マルクス自身の問題意識において連続しているということを可能なかぎり明らかにしてきた。

さて、われわれが明らかにしてきた以上の点、ひとこと言えば、貨幣把握の特殊性とかかわった、初期マルクスにおける論理と歴史の不可分な結びつきは、『資本論』成立史の中でどのように位置づけられるであろうか。

一方の『経哲草稿』「疎外された労働」断片では、論理的方法（のちにマルクスが『経済学批判序説』において明確にする方法）に基づいて、階級関係の再生産を把握するのだが、その際、資本制的労働過程の特殊性（一般的な人間史的過程としての労働過程に対して）がとらえられている。

他方、『ミル評註』では、いまだ投下労働価値説不受容のまま、貨幣の歴史的発生の論理（歴史的発生論）、すなわち、貨幣が資本制に固有なものとして生成してくるという論理が展開されている。

しかも、「疎外された労働」断片において階級関係の再生産把握のあとで提起される問い（本稿〔3〕で検討した「課題」）を受けて、『ミル評註』でのそのような論理展開がなされる、というのがわれわれの推測するところであった。——従って、いまや次のように言うことができよう。まず、これらの著作においては、のちの『資本論』で明らかにされる〈貨幣の資本への転化〉は、いまだ明らかにされていないのみならず、そもそも明らかにする必要がなかったのではないか。つまり、『ミル評註』での貨幣の歴史的発生の論理（貨幣が資本制に固有なものとして生成してくるという論理）のもつ意味は、「疎外された労働」断片末尾での問い（「課題」）を媒介にはじめて了解可能なのであって、〈貨幣の資本への転化〉を明らかにしようという意図はそもそもこの当時のマルクスに

はなかったのではあるまいか。従って、この問題は、その後の研究過程の中で生じたと考えべきであり、しかもそれは、いくつかの媒介項を経て、すなわち、投下労働価値説の受容、剰余価値の発見、〈労働力〉概念の確立等を経て解決するに至るのである。

なお、『資本論』における〈商品・貨幣論〉に、『ミル評註』でのマルクスの考え方が反映されているか否かという点については、さらに今後の検討を要するところである。